HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	司法面接が出来事の報告に及ぼす影響［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	井上, 愛弓
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11179号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55567
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Ayumi_Inoue_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　井　上　愛　弓

学位論文題名
司法面接が出来事の報告に及ぼす影響

本稿は司法面接（以下，FI とする。）が出来事の報告に及ぼす影響について検討したものである。本稿の目的は大きく分けて 2 点ある。1 点目に，FI の効果について統計的に検討することである。FI は，日本の実務において近年普及しつつあるが，諸外国における研究でその効果が実証されているとはいえ，日本においてその効果について検討した研究はまだ数少ない。本稿では，FI の 1 つであり，様々な実証的研究によってその効果が示されている NICHD ガイドラインを使用する。2 点目に，FI の効果と，面接の繰り返しとの交互作用について検討することである。FI では面接は 1 回のみ実施することが推奨されている。しかし，面接を繰り返し行うこと（つまり被面接者に出来事の想起を繰り返し求めること）の功罪について，先行研究では議論の余地があるとされている（e.g., La Rooy, Katz, Malloy, & Lamb, 2010）。想起の繰り返しのメリット・デメリットの問題を面接に投影すると，NICHD ガイドラインを用いて誘導が少なく誤った情報に触れる機会が抑制された面接を繰り返すことについてはデメリットも考えられるが，メリットについても一定の効果を期待できるのではないだろうか。例えば，①想起時の文脈が変わるためにレミニセンスやハイパームネジアが生じる可能性や，②最初の想起が，それ以降思い出すための練習となったり，記憶方略の工夫につながったりする結果，レミニセンスやハイパームネジアが生じる可能性，③思い出した情報自体が，手がかりとなり，その後のさらなる記憶の検索を促進する可能性が考えられる。本稿では，まず一定の統制の取れたサンプルとして大学生を参加者として，FI の効果と面接の繰り返しの効果について実験 1 から 3 で検討し，実験 4 で子どもを対象とした発達的な検討を行った。

実験 1 では，司法面接を繰り返した場合に報告内容に及ぼす影響について調査し，NICHD ガイドラインを用いた面接を繰り返した場合と，用いずに面接を繰り返した場合とを比較した。大学生・大学院生 80 名を参加者として，NICHD ガイドラインを教示して面接を行う条件（FI 条件）ないし質問の仕方に制約を設けずに面接を行う条件（統制条件）に割り当て，2 人 1 組とし，1 人を面接者役，もう 1 人を被面接者役とした。面接者に面接方法を教示している間に被面接者にのみ刺激映像を提示し，それについて聴き取りを行った。その結果，FI 条件では統制条件よりも多くの情報項目が報告されていた。各面接で報告された情報の正確さについてみると，面接回に主効果が認められ，面接 1 回目より 2 回目で正確さは低下していたことが示された。交互作用も有意であり，下位検定を行った結果，FI 条件では面接 1 回目と 2 回目で正確さに有意差はみられなかったが，統制条件では，面接 1 回目から 2 回目にかけて有意に正確さが低下していた。実験 2 では，1 度目の面接で FI を行ったことで，予防効果（自由報告を先に行うことで，他の情報によって記憶が汚染されないまま定着し，後の誘導的な質問への抵抗力がつくという効果；大沼・箱田・大上，2005）があるかを

調査した。大学生・大学院生 120 名を参加者とし，統制面接（以下，CI）を 2 度繰り返す CI-CI 条件，1 度目に FI，2 度目に CI を行う FI-CI 条件にそれぞれ 60 名ずつ割り当てた。報告された情報量についてみると，2 回の面接でどちらも CI を行った場合，1 回目の面接よりも 2 回目の面接で報告された情報量が多かった。これに対し，面接 1 回目で FI を行った場合には，面接 1 回目と 2 回目で報告された情報量に違いは見られなかった。報告された情報の正確さについてみると，1 回目の面接が FI であったかどうかに関わらず，情報の正確さに違いは見られなかった。実験 3 では，1 度目の面接で CI を行ったことにより，誘導的な質問の影響を受けることにより，生成効果（自ら誤情報を生成するという付随的な認知操作があることで，よりエラーが増加し，他者から与えられた情報に比べ，自分で考えた情報をより良く覚えているという記憶現象 ; Slamecka & Graf, 1978）があるかを調査した。大学生・大学院生 120 名を参加者とし，FI を 2 度繰り返す FI-FI 条件，1 度目に CI，2 度目に FI を行う CI-FI 条件にそれぞれ 60 名ずつ割り当てた。報告された情報量についてみると，2 度の面接でどちらも FI を行った場合に，1 度目の面接で CI を行い 2 度目の面接でのみ FI を行った場合よりも面接で報告された情報量が多かった。報告された情報の正確さについてみると，1 度目の面接で FI を行ったかどうかに関わらず，情報の正確さに違いは見られなかった。

実験 4 では，FI を繰り返した場合に，年齢差によって，報告内容に違いがあるのかを調査した。参加者は，小学校低学年 16 名，小学校中学年 19 名，小学校高学年 12 名，中学校 1 年生 18 名，大学生 19 名であった。報告された項目数についてみると，面接 1 回目よりも 2 回目の方が報告された情報項目数が多かった。正確さについてみると，面接 1 回目から 2 回目にかけて報告された情報の正確さが低下していた。年齢に関しては，小学校低学年で正確さが低く，小学校中学年以上では，大学生と同程度であった。

実験 1 から 4 の結果をまとめると，想起を繰り返すことで新たな情報が報告されることがわかった。また，NICHD ガイドラインを用いて面接を繰り返し行えば，用いない場合よりも報告の正確さを低下させるリスクを抑制することができる可能性が示唆された。このことは，面接の繰り返しのメリットの 1 つとして考えられる。また，一貫して報告されている情報は，新たに追加された情報や，最初に報告された後抜け落ちた情報よりも正確であることが示され，一貫して報告されている情報は正確さがある程度保証されているものとして信頼できることが示唆された。また，特に年少児で練習効果が見られた。年少児にとって，自由報告のような形式で覚えていることを他者からの促しもなく話すということは，非日常的で不慣れな状況であるため，1 度自由報告することを経験するということが，後の報告を促進するために重要となることが示唆された。しかし一方で，年少児は大人よりも面接を繰り返した場合に報告の誤りが増えやすいということもある。面接で聴き取る内容についてではなくても，何らかの記憶した体験を対象とした NICHD ガイドラインに基づく面接を 1 度経験させることで，面接への構えを作らせることは，特に年少児に対して，多くの情報を聴き取るためには有効となることが考えられる。

想起の繰り返しのデメリットに対しては，FI では CI よりも，想定されていたデメリットを低減させることができる可能性が示された。想起を繰り返す過程で誘導的な質問の影響を受けて記憶が変容したり，汚染されたりすることについては，ガイドラインに従って質問に一定の制約を設けることで抑制できることが考えられる。しかし，一方で，想起を繰り返した場合に，一定数誤情報の報告が増える可能性については考慮しなければならない。特に，1 度目の面接だけで報告されてい

たり，2 度目の面接で新たに報告されたりするような繰り返しの過程で変化する項目については留意することが求められる。各面接で報告された情報をしっかりと記録し，どの情報がどの面接で報告されたか吟味することが有効といえる。FI では録画・録音が推奨されているが，その重要性が本稿においても再確認された。